

ラグジュアリの意味生成 : 茶会におけるもてなし を手がかりに

著者	木村 純子, 田中 洋
出版者	法政大学経営学会
雑誌名	経営志林
巻	47
号	1
ページ	95-112
発行年	2010-04
URL	http://doi.org/10.15002/00008714

〔資料〕

ラグジュアリの意味生成

—茶会におけるもてなしの手がかりに—

木村純子 / 田中 洋

目次

【問題意識と資料の紹介】

1. 研究の目的と背景
2. 研究対象の設定
3. 方法
4. 主な発見物

【資料】

茶席におけるラグジュアリ

1. 研究の目的と背景

この研究の目的は、日本の茶道のなかにみられるもてなし行動を通じて、贅沢感情がどのように生成するか、贅沢感情の生成メカニズムを探ることにある。我々の今回の主要なリサーチ・クエスチョンは、「なぜ茶会の参加者は贅沢を感じるのか」である。

我々はこれまで著者たちは、ラグジュア리를さまざまな観点からビデオグラフィック手法によって分析してきた。ここでの我々の中心的なリサーチ・クエスチョンは、「ラグジュアリとは消費者にとって何か?(What does luxury mean to consumers?)」というものであった。このクエスチョンに沿って、日本と米国での「普通の人々」へのインタビュー、および日本と中国での富裕層へのインタビューを行ってきた。この結果、ラグジュアリがどのような意味構造をしているかを捉えることができた。これまでに我々がこれまでに焦点を当てたのは個人的に感じられる贅沢感であった。

しかし、我々はこれまでの方法では不十分ではないかと思えてきた。贅沢は個人的に感じるものであるだけでなく、主人—客というもてなしのコンテクストにおいて重要なエレメント

となっている。私たちが今日典型的に贅沢と感じる場所は、その多くが高級なホテルであったり、あるいは豊かな生活を送っている友人宅に招かれたときである。

今回は、もてなしとしての贅沢に焦点を当てることにした。その理由は以下のとおりである。

- 1) 歴史的にも、ラグジュアリは多く誰かをもてなす目的で実行されてきた。例えば、ベルサイユ宮殿はルイ14世が愛人をもてなすために国の予算の3分の1を注ぎ込んだ。
- 2) 日本でも、京都にある桂離宮は日本の典型的な王朝文化の所産として知られている。この建物も17世紀に当時日本貴族文化の中心人物であった後水尾上皇をもてなすために、整備された歴史を持つ。
- 3) 現代の我々が日常贅沢を必要とするのは、お客様を意識するときである。お客様をよりよくもてなすためには贅沢なしつらえを準備することはよくある。

2. 研究対象の設定

そこで、今回は日本の茶の湯を対象として、ビデオグラフィックを行うことにした。なぜ日本の茶道を研究対象としたのか。

茶道とは、客人をお茶によってもてなす儀式のことである。お茶が発明されたのは中国で、日本には早い時期から伝わっていた。お茶は当時楽しみであるだけでなく、医学的な効果をもった神秘的なパワーのある飲料として考えられていた。

お茶を飲む作法を儀式化して、芸術の領域に高めたのはおよそ500年前の茶道家、千利休(せんのりきゅう)である。お茶は16世紀以降、武

士の間で武士のたしなみとして普及した。戦にあけてくれている武士が、ひとときの余裕をもつために、お茶を立ててもらい、お茶を飲んだのである。利休は庶民の間でも行われてきたお茶の作法をも取り入れた。お茶を飲むことは権威や社会的ステータスに関係なく行われる儀式であり、万人のための質素で禁欲的な作法にしたのである。

現在の日本では茶の湯は、多く女性の趣味ごととして考えられている。茶の湯は習って身につけるべきお稽古ごとであり、複雑な約束ごとがある。茶の湯を習うことはオカネのかかる趣味であるが、たしなみのある日本女性になるための修行として考えられている。つまり、茶の湯の趣味を行うことは、実用性よりも、女性の教育として有用であり、かつ学ぶべき教養の一部と考えられてきた。

この意味で、茶道は実用的な消費者行為ではなくて、非日常的に行われる儀式であり、贅沢である。そこにはもてなしという行為が基底にあり、贅沢を感じさせるための仕組みがあるのではないかと考えられた。お茶を分析することで、ラグジュアリの意味をこれまでとは別の視点で捉えることが可能ではないかと思われたのである。

3. 方法

今回、お茶会のセッションを三人の女性に行ってもらい、ビデオにその茶会の様子を撮影した後でインタビューを行った。

今回の茶会の一回のセッションは約20分間。茶会ではホスト役の女性がひとりおり、二名の客人のうち、ひとりが正客となり、もうひとりは相客（正客に伴う客）となった。茶会で重要な役割を果たすのは亭主と正客である。このふたりの間でさまざまなインタラクションが繰り上げられる。

茶会は、お茶でもてなす行為を儀式化したものである。そこには複雑な手順や約束事があり、正式の茶会に参加するためには、こうした手順をあらかじめ勉強しておく必要がある。例えば、お茶が注がれた茶碗をどのように持つか、どの

ように飲むか、また飲んだ後にどのように振舞うべきかが細かく決められている。

茶会は静かな茶室で行われ、非日常的な空間において行われる。かつて茶会は中世の日本においてはふだん戦争にあけくれるサムライの趣味であった。茶室は忙しい殺伐とした日常から逃れて静かな時間を過ごすことのできる貴重な機会なのである。

- ・主人に導かれて客人は茶室に招き入れられる。



写真1 席入り前に蹲で手を清める

- ・挨拶を交わしたのち、菓子が供される。
- ・主人によってお茶が出され客はそれを味わう。
- ・お茶を飲んだ後で、茶道具を拝見して客はそれらを味わう。

19世紀の日本の哲学者、岡倉天心（1964）は茶道について *The Book of Tea* (茶の本) の中で以下のように述べている。

“Teaism is a cult (ceremony) founded on the adoration of the beautiful among the sordid facts of everyday existence.”

茶道は、道教の宗教にルーツを持つものの、宗教的な行為ではない。また純粋に美的な行為でもない。また単なる日常行為でもない。お茶を出すという日常的行動を高度に儀式化したものである。

注意すべきことは、今回の茶会は、主人が客をふたり招いたという形式で行われたもののだが、亭主はお茶の先生であり、茶道を教える立場にある。客人のふたりはその亭主にお茶を習う生徒の立場であるということだ。ただ今回

の生徒ふたりは長い間お茶を練習しているので、茶道にかなりな程度通じた人たちであると言える。

4. 主な発見

今回のインタビューを通じて明らかになったことは、茶会という機会に亭主と客との間にさまざまなインタラクションが存在することである。こうしたインタラクションは次の3つのキーワードで表すことができる。1. チームワーク、2. テーマ性、3. ゲームである。

(1) チームワーク

インタビューのなかでもっとも頻繁に観察されたのは、主人と客との役割期待であった。主人と客とはあらかじめ決められたルールに従って、自分の役割を演じる。茶会は一見すると静かな儀式であるが、それぞれの役割が暗黙のうちに決められており、それぞれは相手のことを思いやることを期待されている。

(2) テーマ性

2つ目の発見物として、茶会のテーマ性が挙げられる。茶会には毎回何らかのテーマが決められている。亭主はそれぞれの茶会のテーマを自分で決める。テーマは季節に合わせて決められるものもあれば、茶会の目的に合わせて決められるものもある。

決められたテーマに沿って菓子の内容や、掛け軸の種類、生けられる花の種類などが決まってくる。こうしたテーマは explicit なものもあれば、implicit なものもある。

(3) ゲーム

茶会で興味深いことは、亭主は客につねに何かおどろきをもたらすような工夫をしていることである。客のひとりには、毎回茶道のお稽古のなかで、毎回必ず「はっとする」ことがあると述べている。

【資料】

日時 2010年1月15日(金)

インフォーマント

東宮先生、久美さん、純子さん

インタビュー

田中洋、木村純子



写真2 お茶席の様子

東宮 例えば、同じ季節に同じお茶会をするとなると、ちょっと工夫して変えるという。基本的なものは同じでも、ちょっと変えるとか。その辺はあれで、全く同じだと面白くないというのもありまして、お菓子を替えるとか、お茶碗を替えてみるということもしますし、それが楽しみでもあります。私は、取り合わせの楽しみというか、亭主の喜びというか楽しみというか。私も、今日は何のお道具を使おうとか、結構楽しませていただきます。何にしようかとか、それがあある意味では楽しみです。

それと、お客さまもある程度分かってくさっていると、今ご覧になっていたと思いますが、正客になった人が会話をしますよね。そのときに、亭主がいろいろ考えてやっけていても、それが全然ピンとこない人だと面白くないですね。だから、亭主とお客さまで一座建立というのですが、うまくお客さまの方で盛り上げていただかないと、亭主が一生懸命しても一人舞台なのです。一人相撲なのです。例えばお能と歌舞伎とか『源氏物語』というものをテーマにすることもあるのです。

田中 そうなのですか。

東宮 そうすると、難しいのですが、例えばお能の取り合わせでやっけていても、正客が全然それを分からなかったら面白くないです。だから、正客になる人は、ある意味では責任があるというか。

田中 なるほど。

東宮 正客が上手だと面白いですよね。

田中 そうすると、何かあるお能の出し物をテーマにして、お道具であるとかこういう。

東宮 例えばお茶杓の銘とか、するわけですよ。例えば、「紅葉狩り」なんていうお能があるとしますと、あれは前シテのお姫さまが鬼に変わるわけです。そうすると、鬼のものを出してみたり、紅葉を出したり。あるいは舞台が戸隠だからお菓子は戸隠から取り寄せたりとか、そのようにしてどこかに出すのです。例えば、「桃太郎」のお話をテーマにするとします。そうすると、きび団子をお菓子にしたり、茶杓は日本一にしたり、どこかで犬とかサルとかキジを出したり、いろいろな。例えば蓋置にしても、例えば鳥の形の蓋置とか、お茶碗の模様が何とかとかいろいろなところで出せるのです。そのようにして取り合わせの楽しみというのをやるのですが、あまりやりすぎると今度は品がなくなってしまうので、そこそこなのです。特に薄茶はそういう遊びは。お濃茶の場合はあまり遊びませんけれども。濃茶は一応厳粛にやるので。薄でそうやって遊ぶというか。

田中 薄茶の方がカジュアルな感じですね。

東宮 そうなのです。

木村 取り上げるテーマというのは、現代的でもいいのですか。

東宮 はい、もちろん。

木村 昔話ではなくても、最近でも。

東宮 構いません。亭主の感性で好きなものにしていいのです。

そういうこともあるということで、別にそういうのがいつもあるということではなくて、ただの季節だけの取り合わせも多いし、本当にピンからキリまでいろいろですね。

田中 そうすると、お茶会を催されるときは、「今日のテーマはこれです」というのが、もちろん分かっている場合もあるのでしょうか。

東宮 送別会のお茶とか追善のお茶というのはもうテーマは初めから分かっていますが、そのほかのは開けてびっくり、お客さまの楽しみなのです。だから、いろいろな道具が出てきてお茶が点ってお菓子を食べていくうちに「今日のテーマは何だろう」と想像するというのがお

客さまの楽しみというのもあるのです。そういうもいつもそんなに物語ができるわけでもないのですけれども。

田中 なるほどね。そういうときのテーマというのは、日本語でいうと、何か呼び方というのはありますか。

東宮 趣向とか取り合わせとか。

田中 趣向ですか。なるほど。

東宮 とか、取り合わせとか。

田中 そうすると、あれですよ。お客さまの方がお茶席に出ているうちに、だんだんそういう。「今日のテーマはこれだったのだ」と気付いたりすることもあるという。

東宮 そうですね。分かった、また面白いと思います。ですね。

田中 なるほど。

東宮 いろいろなお茶会があるので、必ずしもそういう。よく春は「娘道成寺」なんていうのがありますね。

田中 そうですか。

東宮 そうすると、桜のとき、釣鐘の形をしたお釜を使ってみたりとか、そういう遊んだりもするのです。でも、いつもいつもそういう取り合わせがあるということでもないのですが。気軽にお茶を楽しんで。

田中 やはりお茶の面白みというのは、そういう主人と亭主と客との。

東宮 そうですね。そういうのがあるから面白いのだと思うのです。

田中 ですよ。

東宮 もちろん、一つの私たちがよくするお茶席は、別世界と離れて、普段の忙しい生活を忘れて、ひと時ゆったりとした気持ちで過ごしてリラックスしましょうというのが一つの目的なので。お茶室の中に入ると、それはそれですごくくつろいだいい気持ちにはなりますね。そういう難しい設定がどうのこうのということなしに、ただお茶を一杯いただくのです。利休さんは、釜一つあれば茶の湯は成り立つと。道具をいろいろ凝るのは間違いだとさえおっしゃっているのです。あまりわびの境地というか、あまり道具に凝ってしまってもいけないという教えもあるのです。だから、本当にあり合わせの道

具でしばらく静かな時間を持つということです。それがあある意味で、この今の忙しい世の中の時間の中では一つの贅沢な時間だと思います。

田中 なるほど。

木村 何か生活の中で悩みとかおありで、お茶室に入ったならそれを忘れられるということですか。

東宮 そうですね。要するに、お茶室に入ると、普段のことを忘れてというのがあれなのですが。

木村 どうして忘れられるのでしょうか。

東宮 集中するという。お点前は、例えば今私がやっていたら、そのときはそのことしか考えない。ほかのことは考えない。それが多分禪の修行につながるということなのでしょうけれど。座禅するときには、本当にひたすら座って何も考えない無心な気持ちになるということですが、お茶は、例えばお茶を点てながらそういう気持ちになるということ、ほかのことは全部忘れられるというか。お茶杓を例えばふいているときは、やはりこのようにするというあれがありますよね。そのとおりにきちんとやるとか、そういうことしか考えません。お茶筌通しをしているときは、無心になってやります。何か考えていると、やはり乱れるのです。だから、多分それで道ということなのだと思うのです。柔道でも剣道でもやはり無心になってやらないと、「すきあり」ということになりますよね。それと同じようなことが多分お茶でもあるのだと思うので、今やっていることに集中するというか。

亭主は亭主の分を守る、お客さまはお客さまの分を守る。だから、扇子を置いてあいさつするのは、自分は自分の分を守って相手のところに飛び出さないというのがあるそうなのです。一つの座を盛り上げていくというそれぞれの役目を果たして、お正客はお正客で、お話というのですが、一番最後のお客さまはその人の仕事というのがあるのです。それがちゃんとできて、亭主は亭主の役割を果たします。亭主を手伝う人を半東というのですが、半東は半東の役割を果たして、一つの会がうまく盛り上がっていきます。誰かが間違うと、うまくいきま

せん。

例えばお茶の準備にしても、火が起きるまでに大体何分かかるとか、お湯が沸くのに何分かかるといのがありますよね。もちろん季節によって違うのです。では、お客さまがいらっしやって席に入る席入というのですが、席入が何時と決めたら、それまでに全部逆算して用意していくのです。お客さまもやはり何時に集合、席入を何時と決めると、あまり早く来たら亭主は慌てるし、かといって遅れてこられたら炭は火が起きてしまって流れてしまう、それからお湯も冷めます。お料理なんかも出す場合には、やはりその時間というのはすごく大事なのです。そういう暗黙の了解というのですが、みんながうまくそれをちゃんと守るからお茶事という一応正式のお茶がうまく流れて、誰かが一人自分勝手なことをするとうまくできないのです。せっかくお料理を作っている、お客さまが遅れて来られたら冷めてしまいますし、味なんかも。お菓子なんかも、きちんとしたお客さまは「何時に召し上がりますか」と言うのです。それで「いついつに食べます」と言ったら、それに合わせて、やはり一番おいしい時間というのがあるのですね。

田中 お菓子も。

東宮 お菓子にしてもです。だから、なかなかそこまでできないのですけれども、一応昨日のお菓子を出したらおいしくないわけですし。「何時に食べる」と言うと、お菓子屋さんはそのつもりで用意してくれているのです。だから、時間を守るというのはすごく大事です。それでのろのろしていたら、うまくできません。だから、それを修行で、決められたことを決められた時間に。例えば、これは煙草盆なのですが、薄茶のときは出すのです。これが出ていると、リラックスしてくださいということになるそうなんです。濃茶のときは出ていないのです。濃茶は厳粛にするのです。それで、濃茶というのはあまりしゃべらないで静かにやるのです。その濃茶が終わると、一応お香が出てきたりお座布団が出てきたり、リラックスしてくださいということです。薄茶のときは和やかに話を楽しみます。だから、一つのお茶の流れの中で、

お濃茶は厳肅に静かにして、薄茶のところではリラックスして楽しくということですよ。

今日はやっていませんが、炭を入れる炭点前というのがあって、お客さまの前で炭を入れるのです。それで、炭を入れてお湯が沸く間に、お客さまは食事をするのです。そのお食事やはり決まったコースになっているのですが、それがうまくいっていないと、せっかく沸いたお湯が濃茶に間に合わなくて冷めてしまったりとか、早すぎると沸いていないというのがあります。結構、だから面白いのですが。そういう意味ではゲームみたいで。きちんとしたことができるかどうか。

田中 そういうアレンジメントですね。

東宮 そうです。対時間に間に合うようにということで、そういう意味では亭主は水屋と荷物を置いたところのことを全部するのは、やはりチームワークがうまくないとできません。お客さまの方では、お客さまのやり方が間違っているとうまく流れないとか、お茶事のときに返っているべき器が返っていないと亭主も困るとかいろいろルールがあって、そういう楽しみもあります。ただ、一番の楽しみは静かな時間を持つということなので、あまり道具に凝ってしまってもいけないのですが、またそれも楽しいですけど。

田中 お客さんたちも来ていただいてお話を。

東宮 どうぞ、入ってください。

久美 はい。

田中 もうお茶の修行というのは結構長くやっていますか。

純子 どれくらいになるのでしょうか。だいぶなるかと思えます。

東宮 ベテランです。

純子 ベテランではないです。年数だけはたってきました。

田中 なるほど。お茶というのは。お茶を習われるというのは、何か資格ではないですが、何か教授とかありますよね。そういうものをやはりこう。

東宮 順番に。

田中 順番に目指すみたいな。

東宮 入門からだんだん上がっていきまして。

田中 なるほど、やるわけですかね。

純子 でも、よく分からないのですが、きっと最初の方というのはあまり先のことは考えないで、取りあえずお茶をやってみようというのが。私の場合も。

東宮 大抵の方は、お茶の飲み方ぐらい覚えていないと、という動機で始められる方が多いですね。それで、お茶の飲み方が分かったらそれでいいとおっしゃる方もいるけれども、だんだんのめり込んでくる方が多いですね。面白いですから。

田中 なるほど。すると、最終的には、よく分からないのですが、そういうのというのはお茶の先生を目指すということになるのですか。そういう方もいらっしゃるし、そうではない方も。

東宮 いろいろな方がいますけれどもね。

純子 お茶の先生というのは、きっと、自分で目指してなれるものではないと思うのですよね。

田中 そうですか。

東宮 どうですかね。でも、10年もやっていたら、そこそこまで許状はもらえますよね。そこから楽しさが分かってきます。

田中 そうなのですか。どのようにやっていますか、入門当時とだんだんベテランの境地に達してきたときの楽しみの違いというのはどういう感じなのでしょう。

久美 最初はやはり手順を追うだけなのです。覚えようと思うのですけれど、だんだんその手順の動作の意味が分かってきて、そうするとお道具の拝見する楽しさも分かってきて、お茶室に入ったときの掛け軸とかお花とか、そういうことを拝見する楽しさも理由も分かってきて。そうすると、多分どんどんどんどんきりがなく奥が深くなります。

田中 なるほど。さっきやっていますか「このお茶碗はどこののでしょうか」とかそのような会話で、「今日、これを出してくださったのだ」というようなことですか。

久美 お稽古でも先生はお菓子を選んで、毎

回違うものを用意してくださったりとか、お釜も月によって替えてくださったりとか、季節感をきちんと私たちに分かるようにして下さるので、それもまた楽しみです。

田中 なるほど。そういうのは何ですか。先生からお客さんとかお弟子さんへの一種のプレゼントとか、今日はこういうことをして差し上げようという一種の接待、ホスピタリティのようなものですか。

東宮 ホスピタリティとか、生徒が喜ぶだろうなと思ってこちらは準備するのです。季節季節に合わせた道具をなるべく使うと、生徒さんも季節感も分かるだろうし、道具を見る目もだんだん育ってくるだろうし、お稽古とはいいながらそうやってやっているうちに、その取り合わせを自分たちが覚えていくというものもあるし。3月だったら、例えばおひな祭りの趣向にすると。おひな祭りは知っていますが、例えば重陽の節句とか、9月にやる重陽なんて知らないという人もたくさんいますので、そういういわゆる節句とか日本の昔からの伝統行事というものをどこかに取り合わせの中に出すと、生徒もだんだんそれが分かってきます。初めは「重陽とは何ですか」と言っていたのが。

私もお稽古し始めのころは、9月なのになぜ菊のお菓子が出てくるのだろうと。旧暦ですからずれているのですが、重陽というのは菊の節句ですよ。そうすると、菊のものが出てきます。本当に今から思えば恥ずかしいです。何も分からないでお茶会に行ったら、9月に菊がいっぱい出てくるのです。なぜ今こんなにたくさん菊が出てくるのだろうと、だんだん分かってきたら「ああ重陽の節句なのだ」と。そういういわゆる日本の昔からの伝統行事やお祭りとかいろいろなものがありますよね。そういうものもだんだんいつの間にか。

いつの間にかというのがいいですね。学校の教科書みたいにカリキュラムが組んであって、何月何日は何を教えてというのではなくて、最初はお菓子がおいしくてお茶を飲む、それだけでいいのです。それが楽しみでお菓子が楽しみで始めていいのです。特に若い人なんかは。それが1年もたつうちに、何かいろいろなことを

覚えてきた。気が付いたら結構いろいろなことを覚えたよねという感じが、一番お稽古としてはいいのではないかと思うのです。だから、楽しみながら半分遊んでいるようであるけれど、いつの間にかいろいろなことを覚えている。

よく言われるのですが、お茶席に入ると、まず床の間に行って、床の間の前でお軸を見て、お花を見て。お軸もなるべく違ったものを掛けるようにしていますから、こういう季節なのとか誰によって書かれたものなのとか。禅語からきていることが多いですから、その禅語の意味ですよ。それと季節と、お花を見て「ああもうこういう季節なのだ」とか自然の美しさに気が付く。大げさな言い方をすると、日本のよさが分かる、日本人でよかったねとか。お花でも本当に季節感、季節なのだという感じ。

久美 ツバキにもすごいたくさん種類があって、それはお茶をするまでよく分からなかったのですが、いろいろなツバキが本当にたくさん種類があって、それを床の間に飾ってくださると、やはりいろいろと楽しみで勉強させてもらいます。

東宮 特に冬の季節は野草を生けますので、道端に咲いている何でも花が床の間に生けてあると、「え。あの花がこんなに」というか、本当に。「茶席の花は足で生ける」とよく言うのですが、本当にその辺に咲いている花を持ってきてバツと床の間に生けてうまく生けられたら、霧吹きで露を打って。そうすると、自然の美しさに気付くというか。

それで、そのときは別に何もあれなのですが、それが繰り返して何年かたってくると、いつの間にか花の名前も覚えているし禅語も覚えているし、いろいろなことを覚えているなという。お点前の順序だけではなくてね。そうやって1年、2年、何年とたっているうちに、動作、振る舞い、所作も上手になってきて。

田中 純子さんと久美さんも、やっているときに何かそういう驚きとか、何か気付きというか、何かいろいろご経験があると思うのです。何かそういうエピソードをお話いただけると。亭主がこういうことを、先生がこういうことを

やってくださったのだとか。何でも結構ですが。

純子 エピソードですか。今、東宮先生とのつながりは、国際茶道文化協会では先生に教えていただいているのです。たまたまオーストラリアでお茶を差し上げる機会があったのです。そのときまでは、お茶は楽しいし何となくやるということではしていたのですが、言葉が通じないところでも皆さんにとっても喜んでいただいたという実感があったのです。それで、やはり日本の文化というのはすごいのだとそのときに思いました。それだったら、もう少し一生懸命やってみたいという、何というのですか。言葉が通じなくても分かっていただけのものであるのだというのは、とても楽しかったですね。

田中 それは、お茶のどういう部分があると思いますか。

純子 何が楽しく見ていただいたかというのは、でも、すべてを喜んでくださいました。そんなに大きなお道具があったわけでもないのですが、一つにはお着物を着ているということもきっと珍しかったのでしょうか、人の前でお茶を点てて、お客さんがいる前でお茶を点てて目の前の方にお出しするというのがきっと面白かったのですかね。ただ、こんなに喜んでいただけるものが自分の知っているものの中にあるのだというのはとてもうれしいことでした。その後、国際茶道が。

田中 やはり、こうやっていらっしゃることがインターナショナルにもうまく通じることだというような。

純子 そういふのがありました。それで、お教室もいろいろだったのか。お勉強していく中では、あまり変わったことはしてはいけないのではないかと。日本の中にいると、そういう面もあったような気がするのですが、例えば外国に行くと、何も板の間の中でお茶を差し上げることができるとか、お茶室に限らないでお茶を紹介できるということは、とても新鮮な気がしました。

田中 なるほど。久美さん、いかがですか。何かそういう。今までのご経験の中で、お茶を繰り返していらして、何か。

久美 驚きですか。

田中 驚きだけでなくもいいのですが。何でも結構です。

久美 そうですね。まず、これといって大きいということはないのですが、毎日が稽古の中で、必ず何か「はっ」とすることはありますね。最初のころ、先ほどお話ししていたように、松風というのが分からなかったのです。その松風というのが釜が煮える音で、「松風を聞く」というと「お茶を飲みましょう」という意味ですということも知らなかったし、やはりすごく新鮮でした。日本人なのにこういう生活、炉があるというのは体験していませんでしたから、そういうことの一つ一つです。お茶の稽古の中で驚きのエピソードというのは、毎回ありますね。

田中 なるほど。そういう松風という音があって、それが松風というのがイコールお茶を飲むこと。

久美 そうですね。砂浜の間を風が吹いている音を連想してというような、日本人の細かい感性というものです。やはり何か私たちはテレビとか音がいろいろなところにたくさんあるところで生きているので、こういうお茶室の静かなところで、こういうお茶碗に入れる音とか、静かな音を聞くというのがとてもリフレッシュする時間です。

先生が、私たちが喜ぶようにという意味で季節感を出してくださっていると、自分もお客さまを呼ぶときにそういうことに影響されて、何か選ぶのでも「ちょっと季節感を演出しよう」という気持ちにだんだんなっていました。

田中 なるほど。そういう亭主とお客さまの間のインタラクションというか、お互いの、さっきも主客と会話をしていまして、そういう中で「そうだったのですか」みたいなことというのはいろいろ毎回、気付きや何かがあるということでしょうか。

純子 ありますね。普段のお稽古というか、例えば初釜のときとか、またちょっと季節が変わると、それはとても感じます。一つ一つの話の中で連想していくのは、とても楽しいです。

田中 なるほど。やはり季節が変わると、こ

ういろいろな取り合わせが変わっていくのを。

純子 そうですね。

東宮 例えば釜にしても、今、普通のをここでやっていますよね。そうしないといけないというのではないのですが、2月になると寒いですから大きな釜を使うのです。それで、炉も大きくなるのです。

田中 そうなのですか。

東宮 ええ。本当はちゃんと別の部屋があった方がいいのですが、ここは稽古場なので畳を替えて、ここに炉があるのです。

田中 そうなのですか。

東宮 これが1尺4寸の炉なのですが、2月になると1尺8寸の大きな炉になって、大きな釜で湯気をたくさん立てると部屋が暖かいですよね。それで、もっとわびた感じになるのです。1月はお正月の季節ですから華やかにやるのですが、2月になると一転して大きな釜で。例えば炉縁にしても蒔絵がありますよね。そういうものではなくて、木地の炉縁にして本当にわびたものでやるのです。そういう変化も面白いですね。ただ、2月は大炉でないといけないということではないので、それはあれなのですが。

田中 でも、大変なことですね。畳を入れ替えたりして。

東宮 畳を替えて、灰がここにあるのですが、入れて、こちらが空いたのにして。それは逆勝手なのです。普通はお点前していて右側にお客さまがいらっしゃるのですが、大炉になるとあちらから入ってきまして、こちらを向いてお点前するのです。左側にお客さまがいるのです。全然雰囲気。ふさいでしまうと、ここに炉がなかったような顔をしてここに炉がありまして、すごく雰囲気が変わるので、それはそれでわびた姿で面白いのです。お点前する人も、全部ではないですが普段と逆なのです。頭の体操になるのですが、そういうやる人の方も面白いですし、招かれる方も。ただ、何も知らない人が例えば大炉のお茶に呼ばれて、何も知らない人はそれが当たり前だと全然違和感がないのです。不自然ではないのです。

裏千家の11代の玄々斎という方が考え出され

たお点前なのです。玄々斎ですから、幕末から明治の初めにかけて活躍された方ですが、その方が大炉というものを考えました。2月になると大炉になります。しっかり楽しんで。今度は3月になると、あそこの天井から鎖で釜を釣るのです。釣り釜です。そうすると、何となく春の風を感じて、春が来たかなという感じ。それが3月です。4月になると、透木といいまして、釜に羽があります。火を隠して、暑苦しくなっているから火があまり見えない方がいいだろうということで、4月になると透木というのがあります。そうすると、そういう季節なので、透木の釜にはよく桜の模様が付いたりするのです。そのように、お稽古なので私は毎月替えています。もちろん、4月にこれをやっても、ちっとも構わないのです。2月でこれも構わないのです。いけないということでは、ねばならぬということはお茶ではないので、全然何をしても構わないです。もちろん一定のルールはありますが、必ず2月は大炉でないといけないということではないのです。楽しみでやるのです。そのようになってくると、だんだん荷物が増えて、利休さまの釜一つという精神からずれてきています。

田中 そうですね。なるほど。

東宮 一番大事なことは、利休さまの教えの和敬清寂の和の心ですか。和の心で静かな雰囲気を楽しむ。いろいろ楽しんで、それから外れてしまうと駄目なので。

田中 それで、練習で修行を積まれるうちに、だんだん自由さというか、自在さみたいなものがやはり何か出てくるのでしょうか。

東宮 お点前に個性が出てきます。

田中 そうですか。

東宮 それと、同じ人でもそのときの精神状態というか、「今日はどうしたの？ 心配事があるの？」という感じとか、「何かうれしいことがありましたか」と。お点前しているときにその方の気持ちというのも出てきますし、個性はありますね。

田中 そうですか。なるほど。

東宮 初歩の人はそういうことは駄目ですが、ある程度になってくるとその人その人のリズム

というのができてきて、見ている方も「今日はどうしたの?」という感じがいろいろです。それがまたいいのかなと思います。同じことをやっているはずなのですが、みんな違うのです。

純子 そうですね。

田中 純子さんはいかがですか。やっています、やはり最初のころと後の方で、ご自分の中でやっていることが同じ動作でも変わってくるということは経験されていますか。

純子 初歩のころということですか。

田中 そうですね。

純子 多分変わっていると思います。自分では気が付かないのですが、人のことが見えるようになったというのですか。自分が始めたときは、もう自分が教えていただいたことを取りあえずやるのが精いっぱいなのときから、少しは周りの方のことが目に入るようになったというのは、少しは成長したということでしょうか、先生。

東宮 そうですね。余裕ができてくるとね。

田中 なるほどね。ほかの人というのは、亭主であったりとかほかのお客さまであったりとか。

純子 いや、普段のお稽古の中でです。

田中 稽古の中で。なるほど。

純子 今は、お茶会とって、こういう少人数のお茶会というのは、実はあまり経験する機会がないのです。

田中 そうなのですか。

純子 お茶事となると3人とか5人くらいですか、そういうときはまた。お茶事のときは、ちょっと感じは違ってきますよね。ただ、普段のお茶会というのは比較的人数が多い中で過ぐすと、それはあまり周りの方のことはあれですが、普段のお稽古の中で結構目に。自分と相手を比較するというのはいい言い方ではないですが、「自分だったら、こうしてみたい」とか、そういう余裕は少しは出てきたのではないかと思います。

田中 なるほど。久美さんはいかがですか。何か。

久美 そうですね。最初のころは純子さんがおっしゃったように自分の動きで精いっぱいだ

ったのですが、だんだんと相手のお客さまの方の、お稽古場でしたら濃いお茶が好きな人とか薄いお茶が好きな人とかだんだん分かってきますので、お茶を入れる量も加減できたりとか。あとは、まだお菓子を召し上がっているタイミングを考えて、ゆっくりお茶を点てたりとか、早く点てたりとか、そういう周りが見えるようになりましたね。純子さんと同じように。

田中 なるほど。非常に、このお湯をくんだりする動作の中でも、お客さんを見ていて、それで多少ゆっくりやったりとか、そういうことが出てくるわけですよね。

久美 そうですね。やっと最近、急いだ方がいいのかなとか、ゆっくりしなければとか、タイミングをだんだん読めるようにはなりました。と思います。

東宮 そうですね。随分成長されましたよね。

久美 最初のころはただ。

東宮 最初は誰でも自分のやることに精いっぱいでも余裕がないのですよ。だんだん空気が読めるようになってきます。以心伝心という言葉がありますが、言わなくても分かる。KYですか。そういうのがやはりありますね。それが日本の社会なのでしょう。あまり自分の自己主張ばかりしていたら駄目というところはありますよね。やはり周りの空気とか人の心を読むとか、それが和の心なのだと思います。

田中 そうすると、お茶の世界というのが、ご自分がやっているうちにいろいろ発展だとか変化や何かが起こってくるのでしょうかね。

久美 そうですね。それが楽しく、長く続けたいと思うのです。同じことを繰り返しているようでも、やはり全然昨日と今日とは違いますし、先月と今月ではまたもっと違いますし、その点、尽きないという感じでしょうか。

田中 なるほど。例えば今日撮影させていたでています。そこの絵を。お茶会のあれですが。例えば今日なんかだと、あれですか。例えば純子さんが今日正客としていらして、何か。どういうことをこの時間の中でお感じになっていたのか、知りたかったのですが。

純子 座っている間ですか。

田中 そうですね。

純子 多分、カメラのあるときとないときでは、感じ方も違うと。もし本当に2人で先生にお招きいただいたら、これはすごい幸せな気分、まず先生がこれだけのことを用意して下さったということに、きっと感謝の気持ちでいっぱいです。カメラが回っているという、粗相がないようにというのが正直なところで、申し訳ありません。そういうことなのです。

実は今、私も公民館で生徒さんを持つようになりますと、そういうことになって初めて先生のご苦労が分かってきたといいますか。やはり準備されることとか、たとえ毎回のお稽古であってもどこか違うこととか、いつもと同じではいけないというか。それを何気なくさりげなくきっと先生も用意されていて、先生は「大変だ。大変だ」ということはおっしゃらないのですが、自分が用意する立場になって初めて先生のご苦労も、教えるご苦労も分かったというか。

東宮 ありがとうございます。

純子 ですから、そういう気持ちになれたのはうれしいなと思うのです。ですから、なかなかあれですね。座っていても、本当にお呼ばれたとなると、すごく幸せと一緒に、すごく感謝の気持ちはいっぱいですね。目に見えないお仕事がとても多いのです。掃除して畳をふいてとか。いつもきれいになっているように見えても、それはすごい陰のすごい働きがあるこそなので。でも、先生はけろりとしていつも座ってくださるので。

東宮 でも、そういうことをすることが楽しいのですよね。

田中 そうですね。

東宮 わくわくという大げさですが、あの道具、あの道具と何でもふんだんにあるのではなくて、ない中で組み合わせを何とか取り合わせをして、その工夫というか、ぶつからないようにとか、なるべく色を多く、例えばお茶碗と棗にしても、水指の前に置いたときにやはり合う、合わない。それぞれがいくらいいものであっても、置いたときにぶつかることもあるのですよね。うまく合わない。洋服と同じで、セー

ターとスカートがいくら両方がそれぞれがいいものでも、うまく合わないということがありますよね。そういう置いてみてよく合うとか、そういうことも考えながら「何を使おうかな」とか。そういう楽しみながらというか。だから、全然苦にならないのですよね。

純子 先生は何かこういうことがあるときに、「何を使うわよ」とあまりおっしゃらないですね。なので、ここに来るのは実は楽しみです。見て、それは今日もいろいろ先生が。このお水指を見たときは感激しました。私は本当に初めてで。これを本でしか見たことがなかったものですから、幸せと思って。そういう気持ちはやはり。初めてのものに合うというのは本当にうれしいですね。写真でしか見たことがないようなものに出会えるというのは、お招きいただいたときの最高の喜びというか。

田中 なるほど。この水指も。私は全く分からないのですが、どういうところが感激されたのでしょうか。

純子 まず本物というか、実際に使われているのを見たというのが初めてということで、こういうことでもお点前ができるのだというのは頭にはあったのですが。例えば蓋の一つ開けるのにでも、それをどのようにして開けるのだろうか。自分で実際に使ったものがないものですから。黒い光、色が光線できれいに映るので。これはとても幸せでした。

田中 これは何か特別な水指ですか。

東宮 そんなこともないのですが、あまり使わないというのがありますね。普段は割と棚とか陶器の水指、棚を使って陶器の水指というのが多いからということなのだと思いますが。別にそんなに難しいものではないのですが。

田中 これは木でできているのですか。

東宮 はい、塗りです。

田中 塗りでできているのですか。

東宮 漆です。

田中 漆。その漆の拝見されたので、ご覧になったので感激。

純子 いえ、漆のというか。

東宮 あまり使わないのですよ。

純子 使わないですね。



写真3 手桶の水指

田中 なるほど。

東宮 あまり使わないですね。お正月は割と台子といって大きな黒い棚に、皆具といっておそろいの水指と杓立と建水とがセットになった陶器の皆具が多いのですが、何かそれだともう何となく飽きたかなと思って、ちょっと変わったのにしようかなと実は昨日思い付いて。何にしようかなと思って、小さい棚を出そうかなとかいろいろ思ったのですが、「そうだ、手桶にしよう」と昨日思い付いたのです。

田中 そうすると、これは一応もちろん、もともとが水指用ではあるのですね。

東宮 利休がこれを好きだったというエピソードがあって、この手桶をよく使われたらしいのです。

田中 これは手桶のタイプとしての水指ということですか。

東宮 水指ですね。

田中 手桶。なるほど。では、これが今日の出た中では一つの大きな楽しみというか。

純子 はい、私にとっては。

東宮 彼女にとってみればですね。

田中 なるほど。そのほかに何か今日、純子さんが気付かれた点というか何か。

純子 何でしょうね。いずれにしても、年が改まったときの初めてのお席というのはとてもうれしいことですね。この柳の飾りにしても、今でないと拝見できないものですし。何かまた1年頑張らなくてはとか、頑張りたいなという思いには、こういうお飾りを見ると改まる気持

ちになりますね。

田中 なるほど。久美さんはいかがですか。今日の。

久美 今日ですか。今日、そこに座っていて感じたことですか。

田中 はい、そうですね。

久美 今日、ここに次客として座らせていただいて感じたことは、全体的にはただ感謝の気持ちですね。このように先生が準備してくださったところに呼んでいただいたということと、今日撮影があるということと呼んでいただいたということと。とにかくお茶室に来るときは感謝ですね。先生や純子さんがおっしゃっていたように、人をお招きするときとかお稽古するときの準備の大変さというのを、何となく自分でも分かりかけてきているので、ここまでしてくださるにはどのぐらいの時間がかかったとか、朝先生は何時に起きたのかなとかそういうことを思うと。ただ「お稽古に来た」という言葉よりも、「お稽古させていただきます」というのが自然に気持ちの中に出てきます。そこに座らせていただいたときも、やはりありがたいなという気持ちですね。

田中 なるほど。今日のこういうさっきの水指ではないのですが、こういう先生が用意してくださったセッティングの中で、何かこれとは思われたようなことはありますか。

久美 そうですね。やはり純子さんがおっしゃったように、この水指ですね。

田中 やはりそうなのですね。

久美 あと、茶杓もそうですね。

田中 茶杓も。

久美 茶杓も初めて拝見させていただいたのですね。茶杓も一番の今日のメインですが、やはり初釜で台子があったので、台子を想像してきたのですね。先生がおっしゃった黒い大きい棚に今日はしつらいがあるのだろうなという想像でそのまま来たので、それを想像が全く違ったといううれしい喜びと驚きと、それがすごく今日の気持ちの中での。あとは、やはり先生のところは何わせていただいて結構長いのですが、茶杓は初めて。

東宮 初使い。

久美 初使い。

田中 茶杓は今日のはどのようなものでしたか。

東宮 玄々斎という11代の裏千家の家元の中興の祖というのでしょうか。裏千家では偉いというか、一番功績の多かった偉い宗匠なのです。

田中 玄々斎ですか。

東宮 玄々斎です。幕末から明治にかけての方ですが、その方の茶杓で、宗旦という利休の孫、3代目です。その方の茶杓を玄々斎が写しているのです。

田中 写している？ まねをしたということですか。

東宮 元伯というのが宗旦なのですが、「作伝来、秘蔵茶杓写す、今日庵、玄々、松風」と書いてあります。これが玄々斎の花押というか。

田中 花押。なるほど。玄々斎さんの本当にお作りになったものなのですね。

東宮 はい、そうです。

田中 何か竹が、何でしたか。

東宮 何か胡麻竹でしょうか。

田中 胡麻竹とおっしゃっていたのですか。胡麻竹というのは、何かつぶつぶみたいになっているということですね。なるほど。



写真4 玄々斎の花押が入った胡麻竹の茶杓

久美 やはり先生が秘蔵の品を出されたというのは、今日とても大切にしているお席だというのが分かった、ここに呼ばれたということはやはり幸せなことだと思いますね。

田中 なるほど。秘蔵の品であるというのは、

お聞きして分かることなのですか。「これはどういうものでございますか」と正客の方がお聞きして。

久美 そうですね。私はそうですね。もっと目の利く方でしたら、ぱっと見た瞬間にお分かりになるのかもしれないのですが、私のような茶歴の浅い者はやはり説明していただくと分かりますね。ただ、大事なものをお使いになるときは、床の間に飾ってあったりとか、茶杓を入れる木の箱が。そうしますと、やはり招かれたときに今日は大事なものが出るのかなと思いますけど。やはりご亭主の方がそれだ稽古のお席は大切にしているというのが分かりますと、やはりそこで招かれた方の喜びも。

田中 なるほど。招かれた方の。すると、亭主の方としても、この茶道具の出し方というのは、やはりその都度いろいろ考えるのですか。

東宮 そうですね。やはりその季節と、それからその日のお茶会の目的を合わせて、ほかの道具とのバランスですよね。例えば、これが出てきたのですが。

似合う、似合わないというのがありますよね。それと、お茶杓が一応松風で松ですよ。お茶碗が竹ですよ。そうすると、梅をどこかに出したいなとかね。それではお菓子にしておこうと、お菓子を梅にしたのですよね。そういう楽しみというか遊びですが、そういうこともありますね。



写真5 梅をモチーフにしたお菓子

田中 今、先生が話されたような全体のバランスについて、今日は何かお感じになったことは。純子さんと久美さんは何かありますか。

純子 全体のバランス。

田中 ええ、何か全体の。やはりこういうお茶の世界というのは、多分何か一種のハーモニーみたいなことがあるのかもしれないのですが。今日の取り合わせみたいなことで、何かお感じになったことはありますでしょうか。

東宮 お正月だからおめでたい取り合わせというのはありますよね。

久美 何か今日のテーマとびったりな、ラグジュアリな。

田中 ラグジュアリな、なるほど。

久美 そうですね。

田中 どの辺が久美さんとしてはラグジュアリな。

久美 いつもと違うのは、お釜もいつものとは違いますし、お稽古のときのとは違いますし、炉縁も違いますし、とにかく普段とは全く違うしつらいをしてくださっています。

田中 そうだったのですか。

東宮 ハレとケですね。

田中 そうなのですか。

木村 お茶室の中でも？

東宮 はい。同じお茶室の中でも、お軸を替えるだけでも全部雰囲気は変わりますし。

純子 お軸で。先生はお花入から説明されましたが、結局全部変わったと。普段は、例えば花入も、床の間の下座に飾られてあるのです。今日は下で。あれは真の。

東宮 そうですね。横ものだからね。

純子 ええ。横ものなので、真の花入とか。この花入の中にも真・行・草とか。

東宮 お正月だから、格調高くしてあるのですね。

純子 今日はお正月だから、先生は格調高いものをお選びくださって。

田中 なるほど。すみません。私は全然その辺が分からずに見ていたのですが。ごめんなさい。格調が高いというのはどんなところに。

東宮 花が真ん中にありますよね。それで、軸が横ものというのです。

田中 ええ、少し横になって。

東宮 縦に1行ではなくて横ものなのです。真なのです。そうすると、真の花入というのですが、中国の花入ですが、格調の高い真の花入を前に持ってきて生けるといふ真の飾りになるのです。そうすると、ちょっと格調高いという雰囲気が出て、お正月なので。それで、この間の初釜のときは台子を使っていたのですが、それは毎年さっきのお話で恒例の多分同じだったのです。今日は変えてみようというのがあります。同じお正月の雰囲気でもちょっと違うように変えたのです。それで手桶を出したのですね。それがちょっと彼女たちには新鮮だったのだと思うのです。

田中 そうか、なるほど。

東宮 お正月だから台子だろうと思って多分来たのだと思うのですが、ちょっと変えてみました。そういうところに、私としてはみんながびっくりするだろうなという。多分喜んでくれるかなという期待もあるのですが、それが楽しみでもあるのですよね。

田中 なるほど。釜が違うというのは、今日はどういう。

東宮 お稽古用ではないということなのです。これは、やはり先ほどの玄々斎と同じぐらいの時代の太西の釜なのです。太西とって、裏千家の十職の、釜は何、お茶碗は何とそれぞれお抱えの職人が十個あるのです。お茶碗は何、釜は何、表具は何、竹のものは誰とみんなそれぞれあるのです。その中の十職で、格調高い人なのです。時代が大体玄々斎のころの古い釜なのです。だから、これは私にとっては宝物というか、普段のお稽古用とは本当に違う。

田中 なるほど、そうなのですか。これは鋳物ですから相当重いですよね。

東宮 重いですね。

田中 さっき久美さんが相当重い感じでやっていたので、水を入れるとさらに重くなって。

東宮 重いですね。

田中 やはり先生はこういうのは苦勞して集められた道具ということですか。

東宮 これは、たまたまうちの実家から下り

てきたものなのです。

田中 そうなのですか。

東宮 何かあそこの待合の部屋に掛けていたお軸もそうなのです。あれは榊原文翠といいまして、「高砂」なのですが、あのような私の顔も見たことのないひいおじいさんに当たる人がちょっとお茶をしていたらしくて、お道具を持っていたものを少し分けてもらっているものがありまして、そういうものなので、私はなかなか買えないです。

田中 そうですか。そういうのはね。

東宮 だから、そういう意味では、買ったものと違う喜びもあるのですね。お金を出してお金持ちなら何でも買ってしまうというのではなくて、そういう古いところの顔も見たことのない先祖のところから下りてきている、それを使える幸せというもありますね。うれしいですね。買ったものと違う喜びです。

田中 そうですね。なるほど。

東宮 では、お金持ちでお金さえあれば何でも右から左に買ってきてどんとお茶会をする方もいますが、そういうのは意外と分かるのですね。本当に「ああ、お金持ちね」という感じになるのです。だけど、自分がお茶のお稽古をしている間に少しずつ集めてきたものとか、そうやってもらったものとか、家元からいただいたものとか、さっきの干菓子器なんかは家元からいただいたものです。そういうものでできるというのは、またそれが幸せというか、喜びですね。お金持ちがばばぱっとそろえてぼんとやったというのではなくて、また味わい深いものがあるかなと思うのです。本当にお金持ちの人がずらずらと並べてしまう人もいますが、そういうのは意外と分かっていて面白くないのです。

田中 純子さんと久美さんは、こういう道具はどこから先生が手に入れられたということは、何かお聞きになる機会というのがあったのですか。

久美 ありますね。

田中 やはりあるのですか。

久美 先生が準備されているときに、「このお釜は」と言ってお釜についてのエピソードと

かをお話ししてくださいますから、大事に扱わなければという気持ちになりますね。

田中 なるほど。やはりそういう由来を聞くと、こういうものを見ていても、「これはこういうものだ。ひいおじいさんのだ」ということがストリートして伝わってくるということですね。

純子 楽しいですね。

東宮 そうですね。だから、一般的にですが、お茶の道具というのは箱を大事にしますよね。

田中 箱ね。

東宮 箱というのは、結局いろいろな人が持っていて、大事にして箱を付けたり、またその上から箱を付けたりとかして大事にされてきたから残っているわけで、その道具がそれぞれ持っているストーリーというのがあり得るのですよね。それで、お茶で古いものを大事にしたから、今でも道具が残っているということです。例えば、日本にある国宝の天目茶碗なんていうのはもともと中国にあったわけですが、日本に入ってきて大事にしたから今でも残っているわけで、中国にはもうないわけですね。結局、お茶で古いものを大事にして、箱を付けて、そうやって伝来がどうのこうのとやって大事にしたから今まで残っているのです。物がいいだけではなくて、それぞれの道具が持っているヒストリーというか、縁というか、そういうものをみんなが大事にするから、またそれが楽しいから古いものもいいということになるし。ただ、そのものだけではなく、付加価値というのかもしれないませんが、その道具が持っているヒストリーというのがまた面白いですから。

純子 先生のお宅に伺う楽しみの一つに、お玄関を開けると下駄箱の上に。本当に一年中一緒ではないのです。季節ごとに変わるのでよね。それが、まず入って楽しみで。今日皆さんがお荷物を置かれたあそこで着替えるというか、お荷物を片付けたりするのですが、そのお軸も色紙も大体替えてくださっているのですね。ですから、ここに入ってくる前に、まずお玄関で楽しみですね。入った一歩が楽しいですね。

東宮 たまたまですが、今日は玄関のところにかめを置いてあるのです。あれはやはり実家

から来たものなので古いもので、中国の明の時代の宣徳というかめなのです。お正月だからそれを飾ったのですが、それを飾るのが、また私にはうれしいのです。それで、寄りつきのところで榊原文翠のおじいさんとおばあさんの高砂の軸を掛けて、色紙は鵬雲齋大宗匠なのですが、あれは寅年だからなのです。家元の初釜に12年前に伺ったときに、必ず福引があるのですね。その福引で当たったのです。それで、色紙だけ一緒にいただいてきて12年間眠っていたのですが、それを出して。だから、あれも買ったのではなくて、家元の福引で当たったというストーリーがありまして、うれしくて寅年だからまた出てきてちょうだいという感じで飾ったのです。私は楽しんでいますが、生徒さんはそれを喜んでくださっているということですけどね。

田中 なるほど。さっきも会話の中で、やはり何か箱に入って出すとか、そういうお話をされてましたよね。これももちろんそうですしね。何かほかも箱が。

東宮 釜はないのですけどね。

純子 例えば、普通に買うというか、お稽古用でないにしても、こういう書いたものは多分ない。お名前ぐらいはあるのでしょうか。

東宮 これが棗の。これは古曾部といいまして、これはかなり古いです。釜とか炉縁とかと多分同じぐらいだと思います。かなり古いです。これは新しいです。

田中 なるほど。やはり説明されるときにこれは箱入りの何かだというと、当然それは何か由来がはっきりしているということ？

東宮 変なものには箱書きをされませんので、一応箱書きがあるということはある程度以上のものだという話にはなりますね。もちろんいいものは箱があってもなくてもいいのですが。いいものはいいのですが。

田中 このお茶碗は。

東宮 それは竹の絵で、雪がかぶっている竹で雪笹というので、おめでたいのです。

田中 雪笹。なるほど。やはりお正月だから、この雪笹という。

東宮 そうですね。

田中 今日、このお茶碗で出されて、どんな

感じがされましたか。

純子 正直なところを申し上げますと、とてもおいしかったのですが、実は先生、夏、私は前にお茶をこぼしたことがあったのです。それで、今日はお客さまもいらっしゃるので、粗相にないようにという気持ちが先に立ってしまったのです。何かこれは初めていただいて、とても。やはり初めてなものという言い方はおかしいのですが、何度でも楽しみですが、とりわけ初めて手に触るものというのは何とも言えない幸福感に浸れます。

田中 なるほど。こういう笹に雪とかそういう説明を聞かれて、そういうときはどういう。

純子 それは、実は自分で拝見したときに、雪が落ちているようなのだとっていたのです。それで先生がおっしゃってくださったので、自分が思っていたことと同じだったのだなど、納得したという言い方はおかしいですが、今の季節なのだと思う。特にまた笹というのがお正月だったので、同じ雪でも笹に付いていた雪で、軟らかい感じの雪で。

田中 そうですよ。きれいですよね。久美さんはいかがでしたか。

久美 そうですね。私はこのお茶碗は初めてではないので、先生が大切にいらっしゃるお茶碗ということは分かっていたのですが、やはりそのお茶碗が持つストーリーというものがある、今自分の手の中にあるのだと思うと、長い歴史というのですか、年月が長く流れていて、そのままの形で残っていて、今自分の手の中に、この機会、今日、私の手のひらの中にあると思うと、ちょっと感動的です。

田中 なるほど。そうすると、久美さんは以前からこのお茶碗の由来というのはよくご存じでいらして？

久美 よくということはないですが、ちょっとは存じ上げていましたので。

田中 そういう歴史のあるものが今ここにあるというのがやはり。

久美 そうですね。自分が使わせてもらっているというのがありがたいことですし。やはり今日はすごく大切なお道具がたくさんですが、普段のお稽古で使っているお道具でも、やはり

私が今手にしているというのはうれしいですよ。普通の道具でもこうやってお茶を飲む自分がいるということも、一碗の中に感謝の気持ちが出てきます。なので、私はお茶室に入ると、感謝の気持ちということになりますね。

純子 でも、先生は、何気なく、さりげなく出してくださるのです。ひいおじさんが何とかと言ってぼろっと平気でおっしゃるのですが、私たちにしたらなかなかじかに目に触れるとか、もちろんガラス越しに何か見るとかということではできても、なかなか手に触れるということではできないものもあるのです。でも、先生はけろりと「これが何とかで」という感じで出してくださるので、いつものことで「ありがとうございます」なんてけろりとしているのですが、本当にこれは。

東宮 なぜそんな話になってくるかという、大寄せのお茶会とって、大勢のお客さまをお呼びするお茶会が結構このごろ多いのです。そうすると、お茶のあまり心得もない人もいらっしやる可能性というのはすごく多いのです。そうすると、はっきり言って触ってもらいたくないということがあるのです。本当に心得のない人というのは何をするのか分からないので、事故も起きるのです。そういうことを防ぐために、道具を飾ることが多いのです。使わないです。道具を飾っておいて、実際は違う道具を出して使う。お点前する人も、お茶会なんかだと初歩の人がお点前することもありますので。そうすると、確かに古いものというのはもろいのです。だから、扱いが悪いと事故になりかねないので、実際に触らせないというお茶会が多いのですよ。飾っておいて、道具番がいて「触らないでください」という、そういうのも結構あるので。それで、さっきの純子さんのお話が出てくるのです。触らせてもらったという話になってしまっ。

これはそんなに大したものではないですが、本当にもっと古いものだと、何百年たっているようなものだと本当に古いものはもろいのです。そうすると、やはり事故があったときにみんなが困りますので。よく家元なんかもおっしゃるけれども、道具は仮に自分が持っていて、自

分のものではなくてみんなのものという意識で。結局、伝わっていつているということがあるので、そういうことなので、古いものは大事にしないといけないということがあるのではないのでしょうか。だから、お茶会なんかでお使いにならない。大寄せとかたくさんの人、不特定多数の人が来るとやはり困るので、触らないということがあるので。それで実際に。でも、本当の話は使わないと面白くないですよ。

田中 なるほど。そういう伝統や歴史やいわれがあるということは、つまり自分だけのものではなくて。

東宮 ないという気持ちで。

田中 ずっとみんなのものであるという。

東宮 ぐらいの気持ちでしないと、古いものが残っていかないということだと思います。自分だけのものだから何をしたっていいということにはならないですよという教えだと思います。今日のお道具はそんなに難しいものではないですが。だから、古いものが残ってきているということだと思うのです。古いものというのは本当にもろいのです。

田中 そうですね。大昭和製紙というところの社長さんが、バブルのころにルノアールの絵をすごい高額で手に入れて、それを「自分が死ぬときに、棺おけに入れてくれ」と言ったので、とんでもないとフランスでものすごい批判があったというのですが。

東宮 そのように執着する人。

田中 執着するということになりますか。

東宮 もう古い話ですが、松永弾正という武士の人が大事にしている釜を、信長が「それを寄こしなさい」と言ったら「絶対嫌だ」と言って、最後は釜を抱いて自爆したという。そういうこともありますね。そういう話もありますよ。そういう本当に大名が持っているような道具というのはまた全然違いますが。信長はお道具を名物狩りということではいっぱい集めて、大名が持っている道具はまた格が全然違いますが。

田中 このお茶碗なんかも年代物なのでしょうけれど、何か新しいというか、すごくきれいに磨き込んであって。

東宮 そうですね。大事に使っているからなのですが。

田中 あたかも本当に割と最近作られたのかなと思ってしまうぐらい、何か。でも、それはこれを使い込まれているから、いろいろそれなりの味が出て。

東宮 お茶の人はお茶碗を使うときに、大事に使いますね。まず少しぬるま湯で温めて。いきなり熱いお湯を入れたりするとぼっといってしまうから、徐々に徐々に温度を上げていって、つけ込んでいって使うということをしなないと。それでまた、お茶碗は使うと育つというのです。使わないと駄目なのですって。だから、上手に使ってあげると、よさが出てくるということみたいですね。だから、使ってあるのか使っていないのか、見る人が見れば分かるのではないですか。

確かに、それは本当にこういうのではなくて、もっともっと古い利休の時代の楽のお茶碗を見たことがあるのです。最初は棚にぼんと置いてあって、いかにも古びてあれしていたのです。それをその方がお使いになって、お水を入れて、お湯を入れて、お茶を入れて出てきたら、全然違うのですね。だから、お湯に入れて使っているとお茶碗がいきいきとして。だから、使わないで置いておくと、やはり駄目みたいですね。使ってこそそのものみたいですね。だから、お茶碗は使う方がいいみたいですよ。

久美 不思議ですよ。古いものは。

東宮 不思議ですね。あれは私も本当にびっくりでした。利休が育てたという長次郎の楽のお茶碗ですが、それこそ400年ぐらい前のお茶碗でしょうか。それがぼんと置いてあったときには、いかにも古いので、「ああ、そう」という感じだったんです。ところが、それを使われて後で拝見したら、「え、同じものですか」という感じがするのです。全然違うのです。いきいきして。あれはすごい感動でした。

久美 手に入った瞬間、ぼっと手になじむというか。

東宮 やはり用の美というのですが、きっと使ってこそそのものなのでしょう。飾りではないという。

田中 なるほど。本日は、非常に多くのことを学ばせていただきました。貴重なお話をありがとうございました。

本研究は科研費（課題番号：19530393）の助成を受けたものである。